京都女子大学発達教育学部紀要　2022，第18号

地域の文化活動に取り組む女性たち
―アマチュア人形劇団の活動を事例として―

松　崎　行　代
（児童学科）

本論では，人形劇という子どもを主たる観客対象とする地域の文化活動の取り組みが，その活動に取り組む市民，特に母親を中心とした女性にとってどのような役割を果たしたかを考察することを目的とした。調査対象は，枚方人形劇連絡会，船橋地区アマチュア人形劇連絡会，大潟村人形劇同好会「八郎」，東野人形劇あかねとした。その結果，「母親同士の取り組みを通し，子どものより良い生活や育ちを考える意識の拡がりをもたらした」，「自己実現の喜びを感じ，さらなる向上を目指した前向きな姿勢を持たせた」，「自分の世界を拡げ，主体的な市民として自ら活動する姿勢を身に付けた」という３つの成果があったことが考察できた。

キーワード：地域文化活動，社会教育，女性，人形劇

はじめに

母親を中心とする女性たちによる人形劇の活動は，1970年代を中心とした児童文化運動の興隆により全国的に拡がった。日本の人形劇界の活動を下支えしているアマチュア人形劇団は，母親である女性を中心とした劇団が多くの割合を占め，それらのなかには70年代に創立した劇団も多いと言われている[1)]。

1960年代後半，俗悪な子どもをめぐる文化状況に抗して，本や演劇といった児童文化財を媒介に親と子が地域でともに育ち合う自主的な文化運動が拡がりを見せた。玉野は，この運動に対してはそれを担ったのが母親であり，子育てを女性が不当に押しつけられた実態であるとして女性を主体とした社会運動研究の対象にはなりにくかったとし，品川区の地域教育文化運動を地域社会学の視点から検証した。そして，この運動において女性たちが地域社会で自治の主体として一定の成熟を遂げ，地域社会の形成や地方自治の進展という点で極めて重要な働きを担っていたとしてその意義をまとめた[2)]。また深井は，1960年代後半から大都市とその周辺地域から始まった母親を中心とした親子劇場に代表される鑑賞運動や文庫活動は，単なる児童文化の運動や活動ではなく，同時期に始まる教育・福祉・環境問題に取り組む住民運動の一環であり，それを背景とした社会教育を国民の学習権として自覚的に捉える運動であると述べた。そして，この運動が住民運動のような防衛的な性格を持つものではなく，参加した者同士を知り合いにさせて集団をつくり，家事や育児に忙殺され失いかけていた一人の生きた人間としての自分の世界を発見させるという点から，創造的な新しい女性の運動領域だと述べている[3)]。

本論では，筆者がこれまで行ってきた人形劇によるまちづくり研究をもとに，人形劇という子どもを主たる観客対象とする地域の文化活動への取り組みが，その活動に取り組む市民，特に母親を中心とした女性にとってどのような役割を果たしたかを考察することを目的とする。地域の文化活動に取り組むアマチュア人形劇団の活動実態は，これまで日本ウニマ（NPO法

人国際人形劇連盟日本センター）においても十分な情報収集ができておらず，また，研究も行われてこなかった。本論をその端緒にしたいと考えている。

1．各地の人形劇団の調査について

（1）調査団体

調査対象の抽出にあたっては，現在まで長年にわたり活動を継続している団体または劇団であること，また，西日本・東日本の地域の偏りがないことを考慮し，次の４つを調査対象とした。①枚方人形劇連絡会（大阪府枚方市），②船橋地区アマチュア人形劇連絡会（千葉県船橋市），③大潟村人形劇同好会「八郎」（秋田県南秋田郡大潟村），④東野人形劇あかね（長野県飯田市）。

④東野人形劇あかねは，筆者がこれまで研究対象としてきた長野県飯田市の人形劇団である。飯田市は，日本最大の人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ（前身は，人形劇カーニバル飯田）」を 40 年以上にわたり開催し，「人形劇のまち飯田」として人形劇を柱とした文化政策に取り組みまちづくりを進めている。①枚方人形劇連絡会は，人形劇の活動が活発な京阪地域において，アマチュア人形劇団組織の団体として最も歴史が長い。同じく連絡会組織の②船橋地区アマチュア人形劇連絡会は，関東のアマチュア人形劇団組織のなかでも特に活発な活動を継続してきた団体である。③大潟村人形劇同好会「八郎」は，八郎潟の干拓により 1964 年に誕生した大潟村に入植した妻・母親たちによって創立された劇団である。創立時からのメンバーである黒瀬喜多氏は村長を２期にわたり務めたことで注目した。

（2）調査方法および内容

団体の代表者また劇団メンバー複数に，対面または電話による聞き取り調査を実施した。調査期間は，2018 年 11 月から 2021 年３月である。調査内容は，団体または劇団創立の経緯，活動内容とその変遷，参加者の概要および人形劇活動への意識，その他劇団の現状と課題などである。

2．各地の人形劇団の実態

（1）枚方人形劇連絡会

〈調査日〉2018 年 11 月，創立時の代表者 H 氏に対面にて聞き取り調査を実施した。

〈創立の経緯〉

枚方市では，1964 年度より，文部省が推進した家庭教育学級が開設された。1970 年代前半にこの家庭教育学級で人形劇に取り組んだ香里園地区の受講者から，「机上の勉強ばかりはいやや，もっと自分の身体を動かして主体的に行動したい。女が自主的に行動してく中から何かを感じ取ることができたら」[4)] と，地域社会における人形劇の実践活動を通した学びの拡がりを求め，教育委員会社会教育課が担当していた市民講座に人形劇講座の新設を要望した。市がこの要望を受け入れ，1976 年度より「人形劇づくり講習会」が開催された。この講座の第１期修了者によって結成された４つの人形劇団により，同年「枚方人形劇連絡会」が創立された。

枚方市は，戦後，女性の社会的地位向上を求める婦人運動が活発であった。また，1963 年には枚方市教育委員会が「枚方テーゼ」と呼ばれる答申書『枚方市における社会教育のあり方』を発行し，そこには「社会教育の主体は市民であり，それは住民自治の力になる」と市民自らが学ぶことの意義が示された。こうした社会教育が活発な地域社会の背景があったことは，母親を中心とする女性たちが学びの要望を市に伝え，さらなる活動の発展を願い人形劇連絡会を誕生させた要因として少なからず影響していたと考えられる。

〈活動内容および連絡会の変遷〉

「人形劇づくり講習会」は，第１期からの数年間は，「人形劇団クラルテ（大阪・プロ）」の劇団員が講師となった。しかしその後，諸般の事情により，聞き取り調査を行った H 氏を中心に連絡会のメンバーが講師を務め新たな受講者を指導するようになった。つまり，教える・習うという学び合いの関係が市民の間につくら

れた。これは，教える側にとっても技術向上はもちろん文化活動に取り組む主体性や責任感を育むとともに，人形劇に取り組む市民同士の間に強い結束を生み出した。こうして講習会は毎年多くの新たな受講者を集め，修了後に結成された人形劇団が連絡会に加盟していった。

1982年度，地域での上演活動に取り組むなかで生じてきた課題に対しさらなる学びの場の必要性を感じた連絡会は，「人形劇中級講座」の開催をあらためて市に要望した。連絡会が望んだのは，演技の技術向上のための学びの場，連絡会に加盟する劇団相互の学び合いの場，人形劇とは何かという基本について考える学びの場であった。中級講座は，連絡会が主体となって内容，日程，講師の選考等の企画を行い，自分たちの学びの場を自分たちでつくり上げた。1983年度の中級講座では，６月に「人形の作り方」，７月に「発声法・セリフ術」，８月には１泊２日の合宿のかたちで「人形劇団京芸の谷ひろし氏の人形劇人生を聞く」および「２劇団の合評会」そして夜を徹しての人形劇談義，10月に「人形劇団京芸（京都・プロ）の稽古場見学」，11月に「人形劇団クラルテの観劇と合評交流」といった具合である[5)]。「中級講座」に参加した連絡会メンバーは，「少人数でも楽しい人形劇ができるのだと自信を持った」，「主婦の片手間の気持ちが抜けないでいたが，人形劇がどのように自分の内に定着していくのかの感覚が掴めた」「中級講座は，活動を始めたばかりの途方にくれた私たちの行く手を導く羅針盤のよう」など，各々がさらに力をつけ自信をもって地域の人形劇活動を行っていくための土台づくりになったと大好評であった[6)]。なかでも１泊２日の合宿は，妻であり母親である立場では参加に困難さが伴ったものの，人形劇への共通の思いを持つ仲間と人形劇だけに集中できる環境に身を置けたことは大きな刺激となり，合宿の評判が連絡会への入会グループの増加をもたらした[7)]。

しかし，この中級講座に求められていた劇団相互の学び合いの場に関しては実現が難しく，連絡会でも検討が続けられていた。そんななか，1983年４月，駅前のビル内に市民の自主活動の場として無料で使用できる実質公民館のような「サンプラザ市民センター」が開館した。この開館記念行事で連絡会が人形劇公演を行ったことをきっかけに，同館で「サンサン人形劇場」という人形劇定期公演を毎月開催することとなった。連絡会では加盟劇団が順番に公演を担当し市民に人形劇を楽しんでもらうと同時に，連絡会加盟劇団がお互いに観劇し合評を通して学び合う研修の場と位置付けた。「サンサン人形劇場」はその後，市内各地区の公民館を会場に年９・10回のペースで開催を続けて現在に至り，2021年11月には第337回を開催する。

このように，人形劇技術の向上，劇団同士の交流と研鑽，市民への人形劇の普及に取り組んできた枚方人形劇連絡会は，1990年３月に，連絡会の活動の大きな柱となる「ひらかた人形劇フェスティバル」を誕生させた。このフェスティバルは，飯田市で開催される人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」のようなものを枚方市でも開催したいと考えた連絡会が，公民館職員１名を誘い自費で飯田を視察し，年度途中にもかかわらず「予算は連絡会が負担するので会場使用の協力をしてほしい」と年度内の開催を要望し，３月に開催を実現させた。当時の牧野公民館館長は，30周年を迎えたフェスティバルに際し連絡会の女性たちの熱意と実行力に驚いた思い出を語っている[8)]。

全国から集まるプロ・アマチュア劇団の人形劇を市民が楽しむ公演，人形劇を演じて遊ぶ楽しさを味わってもらうワークショップ，劇団同士・市民と劇団が交流する喫茶コーナーなど充実した内容を企画し，2021年３月の開催で32回を数えた。毎年全国各地から参加する劇団は50以上，以前は市内の複数の公民館を会場にしていたが近年は牧野生涯学習市民センターを主たる会場にしている。会場周辺の商店街等の協力のもと地域を挙げてのイベントとなっており，子どもから高齢者まで延べ4,000人以上が訪れる枚方を代表する文化イベントとして定着している。

〈参加者の概要および人形劇活動への意識〉

現在，枚方人形劇連絡会には12劇団が加盟している。一時は16劇団が加盟していたが，引っ越しや仕事，高齢化，体調不良などで解散した劇団もある。各劇団は高齢化が進み，孫を持つ60・70歳代が多くを占めている。かつて自分たちが人形劇を始めた20・30歳代といった幼児や小学生を持つ人たちが新たに人形劇に取り組む動きはなく，高齢化とメンバーの減少が個々の劇団の活動の継続ばかりではなくひらかた人形劇フェスティバルなど地域に定着した連絡会の事業の継続においても課題となっている。メンバーたちは，体が動く限り人形劇を続けたいと考え，人形劇を生活の張り合いの一つとして活動に取り組んでいる。喜んでくれる子どもたちの笑顔，そして，劇団や連絡会という仲間との協同活動であることで感じられる楽しみが，活動への取り組みを後押ししている。

連絡会が作成するブログに掲載された劇団紹介には、メンバーが人形劇に取り組む思いがつづられている[9)]。最も多いのは，「人形劇を通してのさまざまな人との出会いに対しての喜び」である。観劇した子どもや親，高齢者の喜ぶ顔は，人形劇を演じていることへの満足感だけではなくメンバー各自がこれから生きていく上での力にもなっているという。また，「さまざまな人との出会いや人形劇作品を創造する活動を通し，自分自身の思考･活動の範囲が広がった」という声も多い。作品をつくりあげていくときのワクワク感や上演する自分や仲間の輝く姿を実感することが大きな喜びとなっている。子育て以外に夢中になれることを探していたというメンバーは，「人形劇を通して，少しでも今の自分を一歩前へ前進していけるようにさらに頑張っていきたい」と述べている。

また，聞き取り調査においてＨ氏は，「人形劇であれば，自分が演じるのではなく人形が観客の目に触れて演じるので，自分がどんな役でも演じられる」ことが人形劇に取り組む魅力であり面白い点だとし，自身が講師を務めた講座において，開始の顔合わせの時と講座終了時の発表会の時とを比べると，仲間の容姿が同じ人とは思えないほど変化していることに，それまでに取り組んでいたコーラスとは違う喜びを感じた」と述べていた。自分ではないものになって演じるという表現活動の持つ力といえる。

（2）船橋地区アマチュア人形劇連絡会

〈調査日〉2021年３月，現在連絡会代表を務めるＴ氏に電話にて聞き取り調査を実施した。

〈創立の経緯〉

船橋市は1950年代後半頃から大規模な住宅団地の開発が進み，1960年ごろから1975年ごろにかけ人口が急増した。新たに建設された団地に移住してきた核家族の専業主婦らは，子どもの教育や地域コミュニティに関心を持つ人々が多く，全国的な児童文化運動の興隆という社会的背景もあり，船橋市においても多くの母親らが文庫活動をはじめとする児童文化活動に取り組んでいた。

こうした文庫活動やＰＴＡ活動のなかで人形劇に取り組んだことをきっかけに，母親を中心とした女性たちが次々に人形劇団を結成し活動を始めた。1974年，船橋市東部公民館はこうした市民の動きをみて人形劇フェスティバルの開催を呼びかけた。翌1975年，この公民館の呼びかけに参集した６つの劇団と東部公民館の代表者をあわせた７名がフェスティバル準備委員会を結成し，同年５月に「第１回船橋人形劇フェスティバル」が開催された。そして，このフェスティバル終了後，参加した６劇団により「船橋地区アマチュア人形劇連絡会」が創立した。

〈活動内容および連絡会の変遷〉

「船橋人形劇フェスティバル」は，翌1976年度の第２回よりフェスティバルの名称を連絡会の名称に合わせて「船橋地区アマチュア人形劇フェスティバル」に変更し，市内の公民館を会場に年に１・２回の開催を続け現在に至っている。近年は「ふなばしアンデルセン公園」を会場として開催し，新型コロナウイルス感染拡大前の2019年までで50回を数えた。連絡会は，このフェスティバルを，船橋の子どもたちが人形劇に触れ楽しんでもらうことを目的に取り組

み，連絡会に加盟する劇団が総出演し１日ないし２日間にわたって連続上演を行う。

連絡会では，これとは別に市内３カ所を会場に定期公演を行っている。「ららぽーと人形劇場」の定期公演は，連絡会発足10周年目にあたる1985年，連絡会が船橋市に対して，市民がより身近な場で人形劇を定期的に楽しめる場を設営することを要望し，総合ショッピングセンター「ららぽーと」内に連絡会の常設劇場として「船橋人形劇でくinららぽーと」を開設してもらい月１回の定期公演を開始した。その後1988年には，ららぽーと内のビデオシアターを改装した「ららぽーと劇場」に会場を移した。

さらにこれに続くこと，1996年に都市公園として新装開園された「ふなばしアンデルセン公園」内の野外劇場で，年間10回程度の定期公演を行うこととなった。

ショッピングセンター「ららぽーと」への人形劇場開設および「アンデルセン公園野外劇場」での人形劇定期公演に関しては，当時の市長をはじめ市の職員が人形劇および連絡会の活動に対して理解が大きかったことが背景にある。現在もこの定期公演は継続されてはいるが，市と連絡会との関係において，かつて受給していた市の活動助成金は，連絡会の活動内容が市の考えと合わなくなったことを理由に現在は受給していないとのことである。

もう１つの定期公演は県立船橋特別支援学校での公演で，2002年に学校から連絡会加盟の１劇団に上演依頼があったことで始まった。翌年度からは，連絡会の加盟劇団が持ち回りで年５・６回の定期公演を行うことになり現在に至っている。学校という場で年間を通して定期的に上演を行うことで，子どもたちとの関係がつくられ人形劇を通した子どもたちの育ちの様子を実感できることがやりがいになっている。

連絡会では月１回会議をもち，その際，各定期公演の報告と反省，次回担当劇団への申し送り事項を確認し，各回の定期公演が支障なく開催できるようにしている。

また，連絡会が人形劇フェスティバルおよび定期公演の上演活動にあわせて発足以来力を入れて取り組んできたのは，研修活動である。これは，前述した枚方人形劇連絡会と共通する。子どもたちを中心とした観客に満足してもらえる作品をつくり届けるためには，自分たちの技能を向上させることの必要性を船橋の連絡会も考えていた。人形劇は総合芸術と言われているが，人形劇をつくりあげるさまざまな要素を網羅するように，研修内容は人形美術，演出，脚本，演技，照明，音響と幅広く，研修の方法も工夫されている。プロの人形劇団関係者を講師に招き人形作りや演じ方を講習してもらったり連絡会の劇団の作品を講評してもらったりという講習会や，優れた人形劇を観ることを学びの場と考え国内外の人形劇団の公演会を開催し市民とともに観劇することも研修に位置付けた。海外劇団の公演においては，日本ウニマや海外劇団招聘事業に携わるプロデューサーと連絡を取りながらの取り組みとなる。また，国内の劇団の公演にしても，劇団や会場となる会館および行政との交渉，広報，当日の会場運営など幅広い業務を担うこととなり，連絡会メンバーには強い主体性や交渉力などさまざまなちからが求められることは想像に難くない。

最後にこの連絡会の活動内容として採り上げておきたいのは，海外の人形劇フェスティバルへの参加である。1984年東ドイツ（現ドイツ）のドレスデンで開催された第14回ウニマ総会世界人形劇フェスティバル'84ドレスデン，1992年チェコスロバキア（現チェコ）のプラハで開始されたジャパン・ウィークフェスティバルinプラハ'92，そして，1997年フランスのシャルルヴィル・メジエールで開催された第11回世界人形劇フェスティバルinシャルルヴィル・メジエールには長年の地域文化活動を評価されて国際ウニマ事務局より招待を受けて参加した。シャルルヴィル・メジエールでは，公演の他に習字やお茶，着付けなど日本文化体験のワークショップも開催し，現地の市民との文化交流を行った。また，1988年に日本の３都市（東京・愛知・長野）で開催された第15回ウニマ総会世界人形劇フェスティバル'88では，連絡会が要望し，東京大会の一部を船橋で

開催した。この成功は，船橋地区アマチュア人形劇連絡会の存在を広く日本の人形劇界に周知させた。連絡会は，強い向学心によるアカデミックな取り組みを展開し，船橋から日本そして世界の人形劇にまで視野を拡げ，自分たちの技能向上ばかりではなく人形劇の普及と発展を望んだ取り組みを行ってきた。

〈参加者の概要〉

連絡会加盟劇団は，創立時は６劇団であったが，40 周年記念誌[10] に記載されている記録から，これまでの加盟劇団の総数は 21 劇団を数えた。現在加盟している劇団は７劇団である。

「かつてはお母さん劇団と言われていたが，今では孫がいるおばあさん劇団」と自称していることからもわかるように，現在連絡会に加盟する劇団の多くが高齢化している。これは，今回調査したすべての団体および劇団に共通する課題である。

（3）大潟村人形劇同好会「八郎」

〈調査日〉2021 年３月，同好会メンバー８名と対面にて聞き取り調査を実施した。

〈創立の経緯〉

大潟村人形劇同好会「八郎」が所在する秋田県南秋田郡大潟村は，琵琶湖に次ぐ大きさの八郎潟干拓によって 1964 年に新しく誕生した。大潟村には，1967 年の第１次から 1974 年の第５次にかけ，厳しい選抜をくぐり研修を終えた若い男性入植者とその妻が全国から集まった。大潟村の農業は，政府が当時理想とした大規模経営，機械化による省力化と生産性の高い自立専業農家の育成を目指す実験場としての位置づけであった。村は生活機能を優先し，湖を干拓してできた広大な農地の中心に入植者住宅と役場，農協，交番，保育園・幼稚園，小中学校などの公共施設を１箇所にまとめた総合中心地をつくった。入植者には秋田県を中心とした東北出身者が多かったものの，全国各地から集まった 20・30 歳代を中心とした若者たちが，誕生したばかりの村で生活を始めた。干拓地で一から始める稲作，そして，なにもないところに各地から集まった若者が地域社会を築いていくことは並大抵のことではなかったといえる。

人形劇同好会「八郎」は，こうした入植者の若い妻・母親たちが，友達づくりを求めて始めた親子読書会が始まりだった。同級生の子どもをもつ母親同士や同じ居住区の母親同士というつながりでメンバーが集まり，児童館で読み聞かせの活動を始めたが，次第にメンバーが減少し３名になってしまった。そこで，1977 年，子どもたちにより強いインパクトで物語の世界を届け楽しんでもらうことができるのではないかと考え人形劇に取り組むこととした。人形劇は，かつて保育者であったメンバーからの提案で，他のメンバーも人形劇ならば自分が出なくてもいいという気持ちから取り組みに賛同した。

メンバーは全員農家の主婦であり，各家庭での農業へのかかわり方はそれぞれではあるが，夏ごろまでにその年に演じる人形劇作品を決め，メンバーが一同に会して行う同好会の活動は 11 月から３月までの農閑期の５ヵ月間とした。７ヵ月間を空け毎年５ヵ月間活動するというサイクルを 43 年以上継続し，自然消滅せずに活動を続けてきたことは特筆すべきといえる。

〈活動内容および変遷〉

同好会では，上述したように，11 月から翌年の３月までの約５ヵ月間で，毎年１作品をつくりあげ上演を行うというパターンで活動を続けてきた。夏ごろにその年の作品（物語）を決定し，脚本や人形デザイン等の作業は各自で進め，一同が揃う 11 月から人形や舞台美術の制作，演技の練習となる。

同好会創立時の 1977 度から 1980 年度までは，村内の幼稚園からの依頼と自主公演として村内の公民館で年度末の２・３月に上演を行っていた。その後，1983 年度からは村内の保育園でも，さらに 1983・1984 年度には村外の障がい者施設での上演依頼を受け上演した。創立から 20 年が経過した 1977 年ごろには，村内の「健康館」で高齢者への上演，週休５日制導入が始まった 1993 年からは，「健康館」を会場に，学校五日制事業として小学生を中心とした子どもたちへの人形劇の上演が行われるようになった。その

他の上演活動は，依頼があれば可能な限り行うが現在は少ない。

創立時の同好会メンバーには人形劇の経験者がいなかったため，創立時には秋田市在住の元人形劇団員の方に来村してもらい，人形の作り方や動かし方の指導を受けたが，その後はまったくの自己流で，メンバーが工夫を凝らし人形作りから，脚本の創作，上演の演出に取り組み活動を続けてきた。メンバーはそれぞれが得意とする分野を活かし自然な流れの中で役割が決まっていった。読書好きで読み語りのボランティア活動もしているＩさんは脚本の創作を担当，裁縫が得意なＫさんは衣装作り担当でメンバーへの指導も行う，絵画が得意なＳさんは同好会唯一の背景画担当の絵描き，音楽的センスのあるＴさんは音響・効果音担当，広い視野をもつＫさんは全体の取りまとめを行うといった具合に，各自の個性が尊重され活かされる協同的な取り組みのなかで活動に取り組んできた。

上述したが，人形劇づくりはプロの講師からの研修などに頼らず自分たちの発想と工夫で取り組んできた。やや大きめの人形と人間の俳優と舞台の人形との掛け合いといった演出の多用は，この同好会の特徴といえる。同好会では，再演作品の場合でも，脚本や舞台美術を見直して改善を施し，毎回新たな作品のようにつくりあげることを信条に取り組んでいる。

また，同好会では，人形劇の上演とは別に，切り絵によるスライド劇「八郎太郎ものがたり」を 2000 年より 1 年に 1 話ずつ，10 年かけて全編を完成させ上演を行った。これは，村内の大潟村干拓博物館の「夢創造講座」に参加したことがきっかけであった。完成したスライドは，博物館に設置され来館者に視聴されている。「八郎太郎ものがたり」は，八郎潟に伝わる伝説である。同好会では自分たちが入植し新たに誕生した大潟村の地域に伝わる昔話を，自分たちの村の文化として後世の子どもたちにまで伝えたいという思いを持って人形劇活動に取り組んできた。その一環が，「八郎太郎ものがたり」のスライド劇であり，2012 年の同好会 35 周年記念公演では，スライド劇をもとにオリジナルの人形劇「八郎太郎ものがたり」を制作し上演した。さらに，2015 年の大潟村村政 50 周年記念事業においても再演した。こうした取り組みの姿には，新しい村に，自分たちの力で文化を創り上げていくという入植者の女性たちの熱い思いがうかがえる。

〈参加者の概要および人形劇活動への意識〉

現在同好会のメンバーは 10 名で，８名は 70 歳代，数年前に新たに参加した 40 歳代が２名である。高齢化が課題となっておりいつまで活動が継続できるかが度々話題にあがるなかで，これまでつくりあげた地域に伝わる昔話の人形劇をより良くつくり直し，それを若いメンバーに地域の文化として引き継いでもらうことを目標として，積極的に新規メンバーの勧誘に取り組んだ。

40 余年前の創立にあたっては，新たにできた村に各地から入植した若い女性たちが仲間を求めて活動に取り組み，人形劇そのものへの取り組み以上に同じ土地に住み境遇を同じくする女性たちが，子育てや家庭の問題，また，親せきや知人のいない土地での心細さを埋める場としての大きな意味を持っていた。実際，メンバーへの聞き取り調査では，「育児に悩んでいた時期に同好会に参加したことで救われた」という思い出を語ったメンバーもいた。メンバーは，人形劇を観劇した子どもや高齢者の喜ぶ様子から得られる満足感や充実感をやりがいとすると同等に，同好会での仲間とのつながりとそこで自分を発揮して人形劇づくりに取り組むことでの自己肯定感が，この活動への取り組みを 40 年以上支えてきたといえる。

数年前に，70 歳代のメンバーとは親子ほどの年の違いがある 40 歳代の若いメンバーが参加したことで，同好会は世代を超えた村内の女性たちのコミュニケーションの場となった。若いメンバーらは義母や母と同年齢の同好会の先輩メンバーとのたわいのない世間話から，子育てや嫁姑の関係，地域社会での問題について学ぶことが多いという。

本論で調査を行った団体および劇団はどこも

高齢化が課題となっているが，「八郎」のメンバーにみる自分たちがこの土地で生み出した文化を次代に継承させたいと考え積極的な勧誘に取り組む姿勢は，他の団体や劇団とは違う人形劇活動に寄せる思いを感じた。これは，何度も言うが，新たにできた村に文化を生み出し残していきたい，この村の文化をつくりあげていきたいということだろう。

最後になったが，本研究の調査対象劇団にこの大潟村人形劇同好会「八郎」を取り上げたのは，メンバーのなかにわが国では珍しい元女性村長がいたことが大きな要因である。創立時からのメンバーである黒瀬喜多氏は，2000年９月から2008年９月までの２期８年にわたり村長を務めた。大潟村は，村ができた直後から食糧管理法の下，国の管理統制に反発する過剰作付け派と国の管理統制に従う食管順守派に二分され，食管法廃止後も二派の間にあるしこりが大きかった。この問題は小さな村だからこそ大変ナイーブな問題で，村民の日常的な話題に直接出てくることはないが常に村民の間に存在している大きな問題である。黒瀬氏の夫は過剰作付け派で，村内の融和のためには女性の候補者の選出が必要と考えた夫ら過剰作付け派の推薦により選挙に出馬した。当選した黒瀬氏は，村長２期８年のなかで村内の対立を突き抜ける住民参加型の村づくりを目指して村政に取り組んだ。本調査の聞き取りにおいて，黒瀬氏は，人形劇をやってきたことと村長としての仕事が直接結びつくことは無いと思うと言いつつ，「文化活動は政治とは全く違う。文化は村をひとつにする機会になるかもしれない」と述べていたのが印象的であった。村長在任中，村民が出演する「ミュージカル八郎干拓物語」に予算を付け取り組んだのは，黒瀬氏の文化の力を形にする思いであったといえる。

（4）東野人形劇あかね

〈調査日〉2020年２月，劇団メンバー６名に対面にて聞き取り調査を実施した。

〈劇団創立のきっかけ〉

長野県飯田市は，1979年に「いいだ人形劇フェスタ（当初は，人形劇カーニバル飯田）」が誕生し，「人形劇のまち飯田」をキャッチフレーズに文化政策によるまちづくりに取り組んできた。東野人形劇あかねは，市内の東野地区公民館を活動拠点として1992年に創立した。

あかねの創立の背景には，1992年度に飯田市が人形劇のまちづくりの一環として，公民館を中心とした市民の人形劇活動の拡がりをねらった，公民館での人形劇活動に対する助成金の予算化があった。当時東野公民館の育成部役員をしていたあかねの代表者Ｈ氏は，かつて飯田子ども劇場の会員活動として人形劇に取り組んだ経験があることや，子どものための活動を担当する育成部の役員であったことから，東野公民館での人形劇活動立ち上げに積極的に動いた。育成部には男性役員もいたが，彼らは人形劇活動にかかわる意思はなく，Ｈ氏を中心に，育成部以外の公民館役員，母親友達，また，地域の知人などに参加を募った。こうして集まったメンバーにより東野公民館での人形劇活動が開始された。

活動開始の翌年1993年に，その年の人形劇カーニバル'93の参加証ワッペンのデザインとなった「あかねちゃん」から名前をとり劇団名を「東野人形劇あかね」と命名した。

〈劇団の活動内容・活動の変遷〉

活動開始当初，初めての作品づくりは，飯田市立図書館の司書に脚本を書いてもらい指導を受けたが，その後は，ほぼメンバー自身が創意工夫して脚本，人形作り，そして上演活動に取り組んだ。劇団が活動を始めた1992年当時，飯田市には，８劇団ほどのアマチュア人形劇団が存在していた。しかし，枚方や船橋のような連絡会といった組織団体はなかった。アマチュア劇団が集まり合同上演回「りんごっこまつり」を開催したが，数回で消滅してしまった。あかねもこの上演会には参加し，地域の劇団との交流を通して人形劇づくりのヒントやアドバイスを得ることができた。

劇団の上演活動は，８月に開催される「いいだ人形劇フェスタ」の他，東野地区のイベントでの上演，保育園や図書館等からの依頼を受け

た上演，また，長野県内の人形劇のイベントに人形劇のまち飯田の人形劇団として招待を受けて上演参加することも多かった。

現在も市内の保育園･認定こども園，デイサービスセンターなどを中心に，依頼を受けての公演を年間 12・13 公演行っている。近年，デイサービスセンターなど高齢者施設での上演が多くなった。その他，2013 年に創設された NPO 法人いいだ人形劇センターが力を入れている市内のアマチュア劇団による定期公演にて上演することも多い。

また，2005 年に開始された，飯田市のアマチュア人形劇団が人形劇のまち飯田で活動する劇団同士の交流と研鑽を目的に開催することとした「いいだ人形劇まつり りんごっこ劇場」には，第１回より実行委員会の１劇団としてかかわり企画・運営および上演も行っている。

飯田市は人形劇のまちとして，飯田文化会館には人形劇のまちづくり係が置かれいいだ人形劇フェスタの事務局業務や小中学校や保育現場への人形劇団の派遣，保育士対象の人形劇講座の開催などを実施している。また，NPO 法人いいだ人形劇センターが，人形劇の公演を企画し国内外の素晴らしい作品を年間を通して市民に提供している。人形劇活動に取り組む市民にとっては大変恵まれている環境といえる。しかし，枚方や船橋の連絡会の活動と比べると，あかねに限らず自分たちから要望を述べて活動を生み出していくといった動きは，飯田市のアマチュア人形劇団のなかには感じられない。これは環境が整い過ぎているからなのか，この点については今後の調査が必要である。

〈参加者の概要および人形劇活動への意識〉

東野人形劇あかねは，創立当時，メンバーの子どもは中学・高校生以上で，自分の子どもに人形劇を観せたいという思いが動機になって活動を始めたわけではなかった。この点は，調査を行った他の団体や劇団とは状況が異なっている。あかねの創立に参加したメンバーは，地区公民館の活動として仲間の勧誘に応じて人形劇に取り組むこととしたが，それは，公民館活動が地域社会に根付いていたという飯田の地域社会的な背景[11]があったこと，市民が公民館を身近に感じていたこと，また，人形劇カーニバルの地区公演が市内全地区の公民館を会場に行われていたことなど，公民館と人形劇のつながりが強かったことが影響したのではないかといえる。また,「いいだ人形劇フェスタ」が始まって 10 数年が経過するなかで，市民は毎年国内外の素晴らしい人形劇に触れその面白さを知っていたことで，観客であった彼女たちを演じる側に向かわせたのではないかといえる。聞き取り調査のなかでも,「カーニバルで観た人形劇が面白くてたまらず，これが人形劇かって衝撃だった。それが忘れられなくて」という発言があった。

劇団創立当時は,正職員,パートの違いはあってもメンバー全員が仕事をもち，かつ，家庭では主婦として家事を主となって行うなかでの人形劇活動への参加であった。月２回の夜の練習，そして，不定期に入る上演活動は，仕事や家事に支障が出ないようにすることを条件に家族に理解され活動を続けてきた。さらに，子どもの受験や父母の介護，夫の死といったことが 30 年間活動を続けるなかでは重なり，大変なときがあった。こうした状況のなかでも活動を続けることができたのは，何でも言い合える仲間同士のつながりがあり，お互いが助け合えたことが大きな要因であったという。

高齢化し創立からのメンバーの１人が亡くなったり体の不調がみられるメンバーもあり，最近は活動の継続に大きな不安を感じることもある。一時期は若いメンバーを勧誘することも考えたが，このメンバーだからこそ気持ちをひとつにして楽しくやってこれたと思い，今はこのメンバーでやれるところまでやろうという考えでいる。

４．地域での人形劇活動が女性たちにもたらした役割と成果

本論で調査を行った母親を中心とする女性達の人形劇団および劇団によって結成された連絡会は，30 年，40 年以上にわたり各地域で継続的に人形劇活動を行ってきた。４つの劇団およ

び団体のうち３つは，子育て中の幼児・児童のわが子のためにという思いが基盤にあるなかでの取り掛かりであったが，子どもが成長した後も人形劇の活動は継続され，すでに60・70歳代の高齢者になった現在も取り組みは続けられている。その活動はアマチュアとして行われるものであり，報酬を目的とはしていない。

彼女たちが長年にわたり活動を継続してきた理由は，この活動が彼女たちの生活の一部として位置付き，それぞれの人生をかたちづくる重要な一片になっていたからだと考える。

４つの劇団および団体の聞き取り調査より把握できた活動内容やその変遷やメンバーたちの意識から，母親を中心とする女性たちが集まり，自分たちの住む地域を基盤に長年取り組んできた人形劇活動が彼女たちにもたらした役割や成果として次の３点があげられる。

１点目は，親でありわが子の存在があったことが母親同士のつながりによる文化活動への取り組みを生み出し，活動の継続のなかで「わが子」のためにからより広く「子どもたち」のためにという意識が拡がったことである。

人形劇に取り組んだきっかけは，母親として子どもを持っていたことが大きく関係していた。子どもの存在自体が母親同士を出会わせる糸口になり母親という同属の者同士をつなげ，わが子を楽しませたい，わが子の成長に役立つことをしたいという活動への取り組みを生み出した。

大潟村人形劇同好会「八郎」は新しい村で母親たちが友達を求めて集まった読書活動がきっかけであったし，枚方や船橋の人形劇連絡会の劇団も家庭教育学級や文庫やPTA活動での母親の出会いがきっかけであった。東野人形劇あかねは，子どもが中学・高校生以上にはなっていたものの全員が母親・主婦という立場を同じくしていたことで，共通の関心事や話題によってつながっていた。

1970年代から80年代，児童文化活動が全国的な広がりを見せたなかで，母親たちの人形劇への取り組みも広がっていった。彼女たちは，はじめ自分の子どもや自分がともに活動をするメンバーの子どもたちといった顔のわかる身近な子どもたちを楽しませたいという思いで人形劇に取り組み始めたが，その活動の変遷を見ると，その地域の子どもたちへと対象を拡げた。枚方人形劇連絡会の「サンサン劇場」は，就園前の小さな子どもから幼児の親子が数多く観劇し，子育て支援の目的も果たしているような公演会である。また，船橋の連絡会が行う特別支援学校での定期公演は，日頃かかわりを持ちにくい障がいをもつ子どもたちとの出会いがあり，その子どもたちの豊かな生活，豊かな育ちを願って上演を行っている。さらに，「八郎」にみられるように，大潟村の昔話を次代の子どもたちに伝えていきたいという思いのなかには，実際には出会うことは無い未来の子どもたちにまで思いをはせて活動に取り組んでいる。

このように，人形劇の活動に取り組んだ母親である女性たちは，活動の場を家や自分の住む地区からより広い地域社会に拡げ，そこで，さまざまな子どもや親子，さまざまな人たちに出会いつながることができた。そして，その出会いの中で，すべての子どもの豊かな生活や育ちについて意識を向けるようになっていった。枚方と船橋の連絡会では，中級講座や研修会で人形劇づくりや演じ方の技能向上を目指したさまざまな学びの場をつくり取り組んでいたが，こうした取り組みの様子からは，子どもたちに届ける児童文化財としてより良いものをつくり届けたいという，一母親としてのわが子への思いではない文化を子どもの届ける地域の文化活動家としての意識の拡がりと高まりがうかがえる。

２点目は，人形劇活動を通した自己実現の喜びが，自分の存在意義を自覚させ，さらなる向上を目指したり新たな取り組みへの前向きに生きる姿勢を生んだということである。

人形劇の活動は，観客がいて観客に観てもらうことで完成する舞台芸術である。観客の中でも子どもたちは舞台に登場する人形の動きに一喜一憂し歓声をあげて喜んでくれる。観客の人形劇への反応や上演後の感想の言葉や笑顔は，演じた者に大きな喜びを感じさせ，やりがいや

自信，次への意欲を生じさせる。他者を喜ばすことができたということは，喜んでくれた相手以上に喜ばせた方により大きな喜びを与えるともいえる。聞き取り調査のなかで，どの方も「観てくれた人が喜んでくれることがやりがいで，また次も頑張ろうと思う」と述べていたが，自分の表現がダイレクトに観客に伝わり，観客の反応がまたすぐにダイレクトに返ってくる舞台芸術は，演者にとってもとても刺激的なものである。

また人形劇は，人形劇をつくり演じる活動のすべてにおいて個人で取り組むものではなく，さまざまな役割を担った者がかかわり気持ちをひとつにして取り組む協同的な活動である。つくる過程においては，脚本，人形，舞台美術，効果音・音楽，挿入歌などといった幅広い要素が求められ，自分の得意な分野からかかわりちからを発揮することができる。「八郎」では，絵が得意な人が舞台美術を，文学好きが役本創作を，裁縫が得意な人が人形の衣装をと，それぞれが技能を活かし合っていた。このように自分の得意なちからを活かせることで，自分のセンスや技術が認められる喜びとお互いを認め合い活かし合える関係がつくられた。こうした経験は自分の存在価値を肯定的に認めることになり，自己肯定感の高まりは前向き主体的な姿勢をもたらしたといえる。そうした姿勢があることで次への目標が持て，40年以上にもわたり人形劇の活動に取り組み続けることができたのではないか。こうした姿勢を持ったメンバーが作品づくりに取り組む際には，妥協しない意見のやり取りが多々あるようであるが，その真剣な話し合いも，ひとりの表現者としての意見を各自が明確に持つという自己を見つめ，自己を発見し，自己を伝える場として，日常生活の中では味わえない自己実現の喜びを感じる場になっているのだといえる。こうした体験は，妻・母親として日常生活を送るなかでは経験できないものである。

３点目は，人形劇を通して自分の世界を拡げ，主体的な市民としての育ちがもたらされたことである。

これは，１点目で述べた，「わが子」から「子どもたち」への意識にも重なるが，どの団体においてもまずは身近な子どもそして地域の子どもたちに人形劇を楽しんでほしいという上演活動の拡がり。そして，子どもたちにふさわしい人形劇について学び考え，自分たちの上演する人形劇の質的向上を目指す活動が基本にあった。

こうした人形劇公演を通した地域活動への参加は，女性達の視点を子どもから地域社会，世界へと広げ，子どもを窓口にはしているが，子どもをとりまくさまざまな人との出会いとつながりを生み出した。地域での人形劇上演においては，保育園や幼稚園，学校，図書館，最近では老人施設などからの依頼もあり，地域社会の様々な施設・団体とのつながりが生まれる。また，社会教育を担当する行政部署を窓口とした行政とのやり取りにより，市とのかかわりもある。枚方の連絡会は，自分たちの学びの要望を市に伝え，人形劇づくり講座を設置してもらいそこから人形劇団が誕生した。そして，連絡会の事業の太い柱になっている「ひらかた人形劇フェスティバル」は，公民館への要望により公民館と連絡会が実行委員会を組んだ活動として市民に浸透した。船橋の連絡会においても，「らぽーと」や「ふなばしアンデルセン公園」の人形劇定期公演は，行政と連携のなかで実践されている。

以上のように，女性達にとって人形劇の上演活動は社会とのつながりを豊かなものにする場になっていた。人形劇の上演や講習会などの活動は行政との連携のなかで実施されることが多いが，その際の一市民・一団体として要望を伝えたり交渉を行うなかに，自分たちの思いを実現させるために取り組む市民としての主体的な姿があったといえる。

おわりに

本論では，各地のアマチュア人形劇団の実態を調査し，地域での人形劇活動に取り組む母親を中心とする女性たちにとって人形劇活動が果たした役割について考察した。その結果，前章

にまとめたように，「母親同士の取り組みを通し，子どものより良い生活や育ちを考える意識の拡がりをもたらした」，「自己実現の喜びを感じ，さらなる向上を目指した前向きな姿勢を持たせた」，「自分の世界を拡げ，主体的な市民として自ら活動する姿勢を身に付けた」という３つの成果がまとめられた。

本論の冒頭で玉野の研究を引用し，1970 年代においては子育てが女性に不当に押しつけられおり，そうした社会のなかで地域の文化活動も母親である女性が中心的に担っていたことに触れた。この点については確かに問題であり，男女共同参画の社会に向けた取り組みが進むなか，家庭における性別役割分業も見直され始めている。本論においては，各地のアマチュア人形劇団の活動の検証として，母親を中心とした女性の人形劇団やその組織団体を４つ取り上げて調査分析を行ったが，この結果は，けして女性だからということではないと考える。母親としての同属的な意識でのつながり合いが，劇団創立の要因となったと上述しているが，これは，父親である男性であっても，「親」という同属でのつながり合い，さらに子どもの幸せを願う人々というつながりが生まれることは容易に想像できる。

現在，核家族化や地域社会での人間関係の希薄化の拡がりが問題となっているが，子どもは人や地域社会とのつながりを生み出す存在としてとても効果的に，大きな影響力を持っていると考えられる。まず親がつながり，親たちが子どものために何かを始めることで，その周りの地域社会の様々な人や機関とつながっていく。その拡がりのなかで自分の存在や他者の存在が認め合えることで，人々が前向きに生きる姿勢を身に付ける。こうした拡がりが，本論の考察から見えてきた。そしてそのなかで取り組む活動が人形劇であることの意味も大きいといえる。つまり，人形劇は観てくれる観客の存在があること，ひとりではできない集団での協同的な活動であるということである。

アマチュア人形劇団の高齢化が課題となっていることも明らかになった。人形劇を観る経験を子どもたちの文化環境として守っていくために，アマチュア人形劇団の存在価値や地域文化活動としてだれが担っていけるのか，今後の研究につなげていきたい。

註

1）潟見英明 2012「日本の人形劇は今」『子どもの文化』2012/ 7・8号，子どもの文化研究所，p65
2）玉野和志 2000「地域女性の教育文化運動」『人文学報』309，首都大学東京人文科学研究科人文学報編集委員会編，pp.27-57
3）深井耀子 1977「地域における児童文化の創造－西日本における家庭文庫・地域文庫・親子劇場運動－」『月刊社会教育』No244，pp.16-22
4）枚方市楠葉公民館 1983『出会いを求めて－昭和五十七年度楠葉公民館の記録－』，枚方市楠葉公民館，p18
5）枚方市教育委員会 1984『枚方の社会教育－昭和五十八年度学習・文化事業の記録－』，枚方市教育委員会，pp.63-64
6）同上，pp.65-66
7）同上，p65
8）ひらかた人形劇フェスティバル実行委員会 2019「くらわんかニュース　30th」２号　ひらかた人形劇フェスティバル実行委員会
9）枚方人形劇連絡会ブログ「劇団紹介」http://hirakatafes22.blog135.fc2.com/category２-1.html（最終閲覧 2021.11.8）
10）船橋地区アマチュア人形劇連絡会 2015『船橋地区アマチュア人形劇連絡会の 40 年』，船橋地区アマチュア人形劇連絡会
11）松崎行代 2019『地域社会からみた人形劇フェスタ－飯田市民 2500 人が参加する背景を探る－』，晃洋書房

謝辞

本論の調査にあたっては，枚方人形劇連絡会，船橋地区アマチュア人形劇連絡会，大潟村人形劇同好会「八郎」，東野人形劇あかねの皆様に対面または電話での聞き取り調査のご協力をいただき深く感謝いたします。コロナウイルス感染拡大により，当初予定しておりました複数回の調査ができなくなりご迷惑をお掛けしましたことをあわせてお詫びいたします。

（本研究は ISPS 科研費 19K0206 の助成を受けたものです。）